



Title	変貌する連環画の〈顔〉：それはいかにして鍛えられていったか
Author(s)	武田, 雅哉
Citation	連環画研究, 5, 98-116
Issue Date	2016-02-28
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98439
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98439
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_5_98-116.pdf



変貌する連環画の〈顔〉

—— それはいかにして鍛えられていったか

武田 雅哉

連環画の「品相」

いまや投資の対象ともなっている古本連環画は、コレクターも増え、値段も数年前とはくらべものにならないところまで高騰している。もとよりコレクターなどではないし、なんとなく集まってしまった自分のコレクションは、中国のコレクターたちの収蔵基準に照らした場合、集める価値もない紙屑同然のものばかりのようである。

ここ数年来、連環画コレクターのための指南書のたぐいがたくさん書かれているが、それによれば、かれらの世界には、「品相」と呼ばれる、コレクションの対象とされる物品のランクがあるようだ。たとえば王玉興『連環画収蔵指南』(黒龍江人民出版社、1999年5月第1版、2003年1月第2版)によれば、コレクターのあいだで古本連環画の価値を決めるひとつの指標は、以下の七つの部位の有無と状態を見るのだという。

- 1 封面(表紙)
- 2 封底(裏表紙)
- 3 書脊(背表紙)
- 4 扉頁(扉頁)
- 5 内容提要頁(内容の説明が書かれている頁)
- 6 画頁(連環画の本体である絵の頁)
- 7 版權頁(版權などの書かれている頁。裏表紙に書かれている場合も多い)

これら七つの部位が揃っているもの、すなわち「七全」であれば、「全品相」とし、欠損しているものを「残品相」とする。これらはまた、状態のよしあしによって11段階に分類される。

十成品相 新品で、変形、摩耗、破れ、折り目、汚れなどもない。

九成品相 ほぼ新品で、変形、破れ、汚れなどはない。摩耗と折り目はある。

八成品相　わりと新品で、変形、破れはない。摩耗、折り目、軽微な汚れあり。

七成品相　やや新品で、摩耗、折り目あり、軽微な変形、破れ、汚れあり。

六成品相　新品なほうで、摩耗、折り目あり、軽微な変形、破れ、汚れあり。

——ここまでは「七全」なので、「全品相」とされる。

五成品相　画頁、扉頁、内容提要頁、書脊、封底、版權頁はあるが、封面が欠損。

四成品相　画頁、扉頁、内容提要頁、封面はあるが、書脊、封底、版權頁が欠損。

三成品相　画頁、扉頁、内容提要頁はあるが、書脊、封面、封底、版權頁が欠損。

二成品相　扉頁、内容提要頁はあるが、書脊、封面、封底、版權頁が欠損し、画頁が一部欠けている。

一成品相　書名の部分は残存しているが、画頁は一部欠けていて、その他のものはすべて欠損。

無品相・零品相　封面、封底、版權頁、書脊、内容提要等がすべて欠損していて、画頁が完全かいなかにかかわらず、書名の記載部分がない。

——これらは「七全」ではないので、「残品相」とされる。

これからすると、私の架蔵のものは、ほぼ半分为「残品相」である。

これらの評価基準は、明らかに、一般の古書籍に対して適応できるものではない。ふつうに購入されて、使用され（読まれ）、古書店に売られた書物であれば、古本であっても、表紙や裏表紙が欠損するというのは、よっぽど手荒い暴行を受けた場合であろう。だが、連環画にかぎっては、さほど異常な状態ではなく、むしろそれが普通なのである。

なぜか。その理由は、連環画に特殊な受容のされかたにある。だれかが書店で連環画を購入し、閲読するという、一般書籍と同様の読書形態ももちろんあるが、多くの場合——特に民国期から、5、60年代にかけて、連環画は、貸本屋で貸し出されるものが主流であった。貸本としての連環画が、どのような運命をたどり、その結果、どうして書物の〈顔〉ともいべき表紙を、まっさきに欠損し、その結果、どのような新たな第二の〈顔〉を持つことになったのか、そしてそれはなにを意味するのか。今回はそのような問題について、具体的な例を示しながら見ていきたい。

小人書攤の風景

貸本としての連環画は、^{しょうじんしょたん}小人書攤などと呼ばれる、主として露店の貸本屋で貸与されるのが、20世紀末くらいまで、街角でよく見かけられた風景であった。

小人書攤の様子を伝える写真を見てみよう。

最初に掲げた写真は、撮影年は明らかではないが、写真の上半分を占める、掲示されている無数の連環画の表紙には、1981年刊行の『酔八仙』（嶺南美術出版社）や、1982年刊行の『小街』（中国電影出版社）などが認められるので、おそらく80年代初頭のものであろう。ここで注意したいのは、ここに見えている表紙は、連環画の本体そのものを並べたものではないということである。本体から表紙だけが剥がされて、賃貸に供される商品のサンプルとして、掲示されているのである。小さな顧客たちは、これを見て読みたいものを選び、貸本屋のおっちゃん（もしくはおばちゃん）に申告すると、奥の部屋の収蔵庫から、表紙を欠いた本編が出てくるというわけである。これは、現在の、タバコやディスクを売る店舗で用いられている方法と類似している。



次の写真は、建国直後、1951年のものであるという。こちらは、棚のなかに連環画がそのまま配置されているタイプのようだ。写真上端に「連聯書店連環圖畫巡迴車」という文字が見えている。連聯書店とは、正式名称を「連環図画出版業聯合書店」と

いい、新中国成立後、私営の連環画出版商が同業者同士で団結し、出版・発行を、円滑かつ計画的におこなうべく組織されたものであり、1950年3月に成立し、7月1日に営業を始めた。成立時には39家の出版商が参加したが、9月には50家にまで増加したという。ここに見える「巡迴車」といった方法も運用されていたのであろう。写真上端には「上海福州路五四〇號」の住所表示も見える。建国初期に、新中国に相応しい連環画を普及すべくおこなわれていた活動なのであろうか。連環画に読みふける子供たちも、どことなくこぎれいであり、新中国のよいこ然としている。



書攤の連環画の配置方法として、本体を屋外にそのまま並べる場合には、日光や雨風の影響をまともに受けるわけだから、表紙のみならず、本全体が物理的に著しいダメージを受けざるをえない。表紙のみ掲示する場合は、剥がされた表紙は痛むが、本体は表紙を失うだけで、雨風の影響は受けなくてすむ。かくして連環画は、その書攤で貸し出されるという、もっとも一般的な受容の形態によって、他の一般書とは異なった運命をたどることになった。なんらかの欠損があるもの（すなわち残品相）のなかで、もっともランクの高いものが、一般書であれば〈顔〉にあたる表紙のないものであったのは、このような、連環画に特徴的な「事情」によるものであろう。もっとも失われやすい部位が、ほかならぬ表紙であったからだ。

架蔵のものの多くは、表紙があるものは、陽光と風雨にさらされた傷跡が痛々しい〔右図〕。そしてまた、表紙を欠いているものが多い。それらの多くは、上海の古書肆を通して民間から買い取ってもらったものだが、もともとは貸本屋で使用されていたものなのであろう。



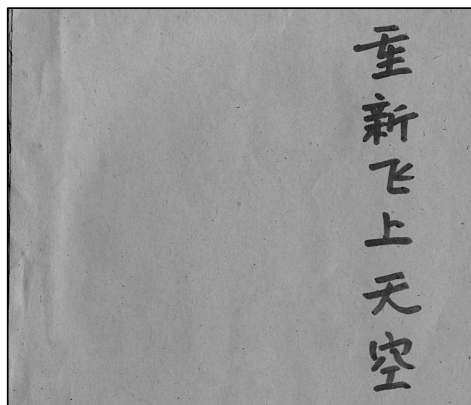
整形された新しい〈顔〉

いったん表紙を剥がされてしまった連環画にも、その後の人生には、さまざまな可能性が用意されていたようである。

ひとつには、もともとの表紙はサンプルとして掲示に使われるが、おそらく貸本屋のおっちゃん（もしくはお婆ちゃん。以下同文）の手になるものであろう、顔を失った本体に、手作りの表紙が新たに貼り付けられている場合がある。

これらはおもに牛皮紙（クラフトペーパー）などで新たに作り直されたものだ。これも、その書攤での使用を想像すれば納得がいくだろう。もともとのキレイな表紙は、剥がされて看板に使われるが、本体のほうは、顧客の手に渡されて閲読に供されるのであるから、やはり顔がないままでは不便ではある。また、本体を保護するという目的もあるだろう。あるいはまた、顔がないのはかわいそうであるという、貸本屋のおっちゃんの愛情も介在したものか。

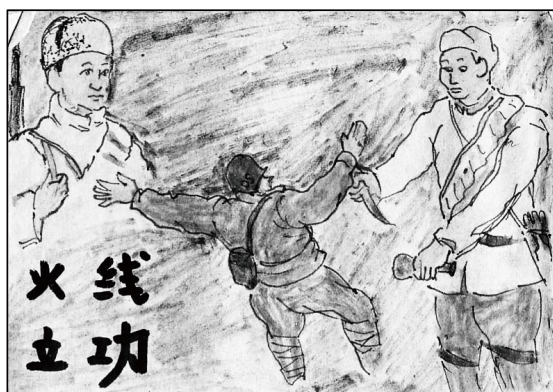
もっとも簡単なのが、仮の表紙を貼って、タイトルだけを書きこんだものである〔右図〕。だが、書攤のおっちゃんのなかには、「これではあまりにも芸がないではないか」と苦悩した、繊細な心を持った者もいたのであろう。



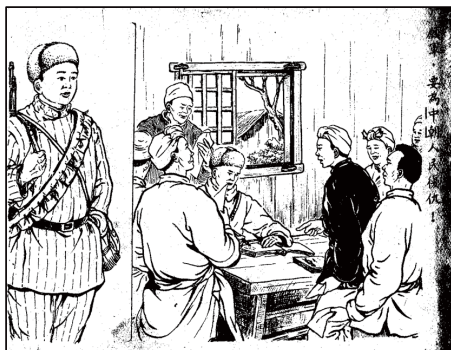
かれらは、みずから、表紙に絵を描くことを課したのであった。これには、かれらの芸術的センス、もしくは絵心というやつが、てきめんに反映された。若いころは画家をめざしていたものの、激動の時代の波浪に翻弄され、こころざしなかばにして挫折し、せめて絵に関わる仕事をと、小人書攤の亭主に落ち着いたものも、あるいはいたのかもしれない。

そんな貸本屋のおっちゃんたちの作品をいくつか鑑賞してみよう。

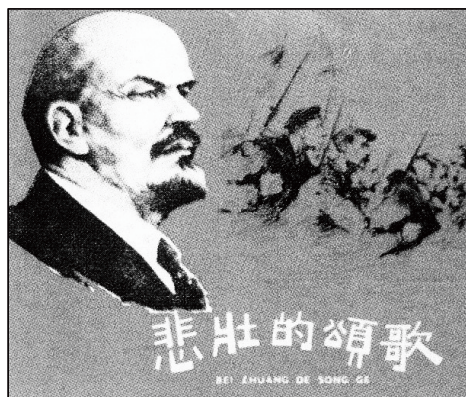
『火線立功』(吉志西/編文、汪綯秋/絵図、学林書店・連聯書店、1951)は朝鮮戦争の志願軍兵士の活躍を描いたものである。本来の表紙がどのようなものであったか、手もとには資料がないのだが、架蔵のものは、牛皮紙を貼ったうえに、水性カラーペンで描かれたお手製の封面である。



左右に志願軍兵士を配し、中央には、かれらに恐れをなしているアメリカ兵が、いささか稚拙なタッチで描かれている。なかを見てみると、表紙絵の左側の志願軍兵士とアメリカ兵とが、作中の2コマを参考にして描かれたことが判明する。



『悲壯的頌歌』(〔蘇聯〕尼・包戈廷/原著、李白英/改編、周光中/絵図、上海人民美術出版社、1962)と題された連環画は、劇作家ニコライ・ポゴージン(1900～1962)によるレーニンものの革命劇3部作(『銃を持つ人』『クレムリンの大時計』『第3悲愴曲』)の第3作を改編して描かれたものであるが、もともとの表紙絵は、このようなものであった〔左図〕。だが、架蔵のものにはすでにかつての表紙はなく、貸本屋の手で作られたものとなっている。この表紙は、本編のなかの1



コマ——レーニンが妹のマリアと語る場面——を模して描かれているものであった。第108コマにあたるその絵は、よく見ると輪郭線がガタガタである。青いインクでなぞられているのだ。表紙絵を製作すべく写し取られた痕跡である〔下図〕。



『消滅空降特務』（彭汝春、陽曉/原著、章程/改編、任伯宏、任伯言/絵図、余白墅/封面画、上海人民美術出版社、1956）は、落下傘で空中から侵入する敵のスパイと戦う話である。これもまた、本来の表紙とはまったく異なった手作りの表紙絵が作られている。そして、やはり本編中の1コマを模写したものだ。これにも、輪郭線には青インクでなぞった痕跡が認められる〔下図〕。

これらから判断するかぎり、貸本屋のおっちゃんとしては、本来の表紙絵を正しく模写して復元しなければならないというような確乎たる意志はないようである。まあ、われわれの知り得ない事情があったであろうから、一概には言えないだろうけれど。



さらに貸本屋のおっちゃんとしては、表紙絵を製作するだけでは飽き足らず、そこに顧客たちへのなんらかのメッセージを書きこむケースもあった。

『簡要大衆衛生』（勞懋傳醫師/編、王井/絵図、群生書店・連聯書店、1952）は、タイトルどおりに、衛生観念を植えつけるための啓蒙書であるが、表紙には掃除をするおじさんに加えて、ネズミ捕りと、捕まえたネズミを火であぶる様子が図解され、「ネズミを捕まえたら、生死にかかわらず手をつかまないこと。火で焼いて深く埋めましょう」と、書かれている〔上図〕。

また、前号で紹介した作品だが、連環画を読みすぎて悪の道に入ってしまった男の半生を描いた『岐途』（余真/改編、李維/絵画、江蘇人民出版社、1956）には、「頭に血がのぼってしまった」「この人はいま 67 歳、徐州の人、本を読んで騙され侠客になろうと妄想した」と、本編のどこにも書かれていないお得な情報が書きこまれていた。

また、絵にはちょっと自信がないのだが……という謙虚な貸本屋のおっちゃんたちのためには、すでに印刷されたなんらかの画像を切って貼り付けるという手もあった。

1959 年から刊行された「群英会画庫」シリーズの 1 冊『不断躍進的裔式娟小組』（柳萱図、黄若谷/原著、羅盤/絵画、1960、上海人民美術出版社）は、紡績工場の女工さんたちの努力と勝利の戦いを描くもので、嫉み渦巻く女工の世界を描いて間然するところがない。群英会画庫シリーズの表紙は、



もともとは勲章をあしらった特徴的なものだが〔上図〕、架蔵の一冊は、これがすべて剥がされたあとに、牛皮紙を貼って表紙とし、紡績工場の女工さんを描いた、別の刷り物を貼り付けている〔左図〕。このような方法による手作り表紙は、架蔵のものでは、わりと多く目にするのである。

『水車』(良士、盧汶、沈鉄錚、盛亮賢、羅既張/編絵、新美術出版社、1953)の表紙も同様の処理をしたものだが、貼り付けられた絵は、じつは『連環画報』(1951年第6期)に掲載された「李順達領導互助組的主要經驗」の1コマであった〔下図〕。



また、ロシア語の能力を駆使して中蘇友好に東奔西走する電話交換手の、革命的ロマンチズムと淡い恋の物語『李淑英』(湯凡/原著、徐進、胡柏華/絵図、新美術出版社、1955)もまた、架蔵のものは、別の刷り物を貼った自作の表紙を持つものであるが〔下左図〕、この女の子がヒロインの李淑英かと思いきや、これまた『連環画報』(1957年第6期〔総第142期〕)に掲載された「一箇愛情的故事」の1コマを切り貼りしたものであり、まったく別人の女工さんであった〔下右図〕。製作者は、表紙全体に机や窓を描き足して、「自然」に見えるよう、努力をおこたらない。

ちなみに、さきほどの『不斷躍進的裔式娟小組』に流用された紡績女工の絵も、この「一箇愛情的故事」の1コマから取ったものだ。



本は大切に

このように、貸本屋で文字どおり身を粉にして奉公する連環画には、表紙絵という〈顔〉を剥がされ、新たな仮面を装着させられるという路をたどったものが多かった。

顔を剥がされないものでも、読まれていくうちに、表紙が破損していくのは必定である。これは貸本屋のみならず、図書館に配架された本たちも同様であろう。かくして、「本を大切にしましょう」という呼びかけは、地球上のいずこの国でも、図書館内に貼られるポスターに書きこまれるスローガンの定番となる。

中国でも、破損した本を補修するという作業は、よいこたちに課せられた重要な作業であった。そして、そのような活動を奨励するポスターは、何点も作られていた。この種のテーマのポスターには、実在する書物が描きこまれ、それらはそのまま「読まれるべき正しい書物」であることを主張している。

1954年のポスター「公共の財産をたいせつに」(我們愛護公共財物)〔右上図〕で、テーブルの上に置かれているのは、ひとりの牧童が日本軍を翻弄する活躍を描いた、劉継^{チー・マオシン}貞の代表作『鶏毛信』(華山/原著、人民美術出版社、1950)である。

また、1959年の低学年向けポスター「たいせつな本を補修しよう」(補一補心愛的書)〔右下図〕には、かれらにふさわしい、絵本などの読み物を修繕する子供たちが描かれている。



描き足される封面

表紙が部分的に損壊を受け、いくばくかの残存する表紙が利用できる場合には、失われた部分をみずから補完しようと考えた者もあった。

ここに、大躍進時代の国営上海第七綿紡績廠における労働者たちの活躍を描いた1958年の作品『一個躍進的工廠』がある。架蔵のものは、奥付のところに「上海申大染織廠・文教委員会・図書館」の印章があるから、ある工場の付属図書館のものだったらしい。その表紙の右半分が破れているために、図書館を管理していた職員の手になるものであろうか、表紙には裏から紙が貼られ、もとの表紙絵を復元すべく筆が加えられている〔右上図〕。ただ惜しいことに、この即興画家は、任務に対する熱意がいささか足りなかったようだ。それは、本来の表紙絵とくらべるならば一目瞭然であろう〔右下図〕。

大躍進の勢いは、天高く飛翔する龍に象徴され、その鼻先に配置された「火珠」のなかには、工場が生産の目標とした最高級の製品「優級紗」（優級紗）の3文字が書きこまれているのだが、加筆版のほうはと見ると、「さすがにこの小さな火珠のなかに3文字も書きこむのは、とうてい無理だから、しかたないだろう、大目に見てくれや」とばかりに、わずかに「優」の1字が書きこまれているのみである。

『小小專家』（1958）の架蔵のものには「上海市南市区建道街第六里弄委員会」との印章がある。里弄委員会は上海の最小自治行政機構だが、その図書館の蔵書らし

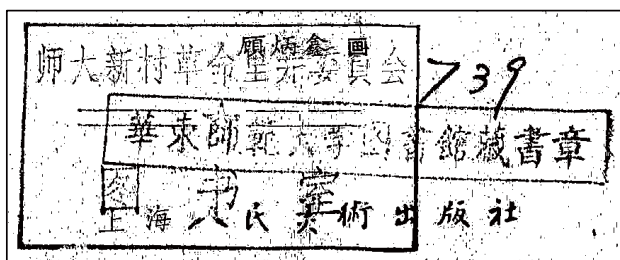
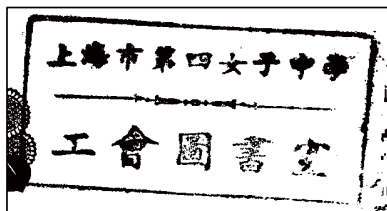
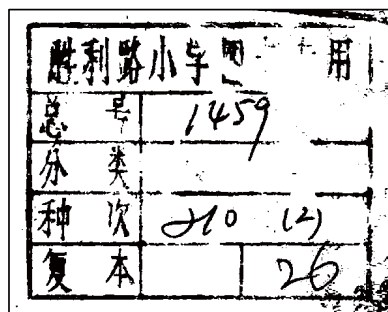


い。表紙絵は主人公の女生徒だが、無惨にも頭部からザックリ斬られている。補修した画家の好みか、彼女はおたふくを彷彿とさせる、ちょっと残念な顔に整形されてしまった〔左図〕。名誉のために、本編中のヒロインの面相を掲げておく。

図書室の蔵書印

子供たちは、私物としての連環画を大切な宝物とみなし、表紙にはしばしば自分の名前を書きこんだものである。図書館のものであれば、図書館の蔵書印が捺され、貸本屋のものであれば、貸本屋の印が捺された。これら表紙や扉頁に捺された印もまた、1冊ごとに異なる連環画の顔であるといえるだろう。

公共機関の図書室の蔵書印は、大きく学校、地区、工会（職場の労働組合）、文革期には革命委員会などのものに分けられる。ここに掲げたものには、広州粵秀師範学校図書館、勝利路小学図書専用、天津市河西区図書館、上海外輪供应公司図書館、上海市楊浦区黎平路小学校大隊委員会・中国少年先鋒隊、上海市第四女子中学工会図書室、上海文化藝術工作者工会中国大戲院委員会・図書室、華東師範大学図書館蔵書章、師大新村革命里弄委員会図書室、などの文字が確認できる。



連環画に捺された図書館の印章として興味深いものが、湖南省中山図書館（現在の湖南図書館）の印章である〔右図〕。これは1959年の『海防線上』（尤・維諾格拉多夫/原作、王士之/改編、凌健/絵図、人民美術出版社）の架蔵本の表紙に捺されていたものだが、注目すべきは、印章の下部に「連環圖」の3文字が認められることであろう。連環画専用の蔵書印が作られていたということは、この図書館では、図書の分類として、連環図・連環画のために独立したジャンルを立てていたということだろうか。



印章に見る貸本屋のオキテ

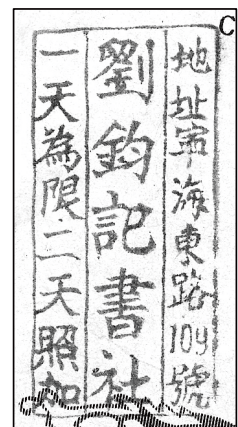
さらに連環画に捺された印として研究に値するのは、貸本屋によって捺された印章であろう。ここには貸本屋の名前のみならず、かれらからのメッセージがうかがえるものもある。

表紙を欠いた連環画『胡椒大王』（1961）の扉には、2種類の印章が捺されていた〔右図〕。左側には「上海市閘北区・淮記書攤・大統路 898 号」とあり、貸本屋の商号と住所が明記されている。また右側の印章には、「閘北区・大統路・書刊租賃業合作小組」とある。貸本屋組合の印章であろう。



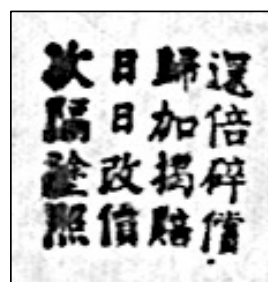
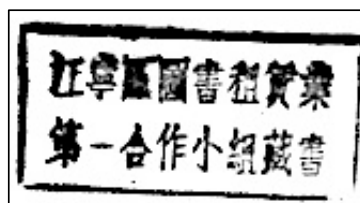
「閘北区・大統路・書刊租賃業合作小組」とある。貸本屋組合の印章であろう。

『草堆裏的槍』（1964）なる連環画の扉には、複数の印章が捺されていたが、ひとつは「地址寧海東路 109 號・劉鈞記書社・一天為限二天照加」〔右図〕というもので、「劉鈞記書社」という商号とその住所だけでなく、「（賃貸期間は）1日とし、2日にわたったら賃料は倍加する」という、賃貸の基本的な規則が明示されている。いまひとつの印章には「扯破小書・照價賠償」（小人書を破損したら、価格に照らして弁償すべし）とある。これもまた、貸本屋の世界の厳しいオキテを明示したものであった〔左図〕。



『伊倫娜，回家去！』（電影連環画冊 1957）には、2種の印章があり、ひとつは「江寧區圖書租賃業第一合作小組藏書」という貸本業組合のもの〔右上図〕。いまひとつは「次日歸還・隔日加倍・塗改揭碎・照價賠償」（翌日に返却すべし。1泊したら料金は2倍。落書きや破損があれば、価格に照らして弁償すべし）との仁義なき鉄則が宣言されている〔右下図〕。

貸本屋のおっちゃんとしては、よいこたちが商売物たる連環画を鄭重にあつかってくれることを、公共の図書館に奉職する官僚主義の職員なんぞよりも、はるかに切実に祈念していたことであろうこと、想像にかたくない。



隔日加倍 撕破照賠
偉民連環圖畫小說出租社
上海新會路二三四弄廿七號

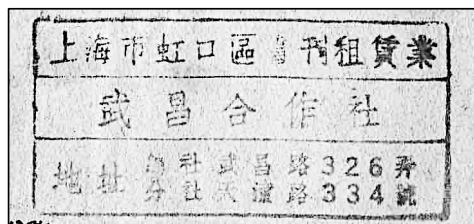
編號 965

類似の印章はいくつか見られる。『海上英雄』（1954）という作品に捺されていたものには、上海の「偉民連環圖畫小說出租社」の規則が明示されている。

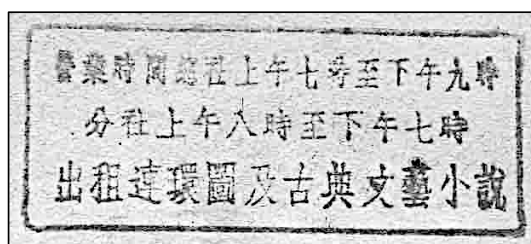
やはりここでも、「1泊したら料金は2倍 破損したら弁償」というオキテが書かれている。賃貸が翌日にわたる場合、料金は2倍になるというのは鉄則であったのであろう〔左図〕。

ここでは商号に「連環圖畫小說」という呼称が用いられている。これは民国時期以来の連環画の呼称のひとつで、1932年に茅盾が書いた、当時の連環画の現状を詳しく報告した貴重なレポートは「“連環図画小説”」というタイトルであった。

『寶爾敦出世』なる1958年の連環画の表紙にも、ふたつの印章が捺されていた。ひとつは「武昌合作社」という上海の貸本屋組合の印章である。総社と分社を持っていたことが示されている。

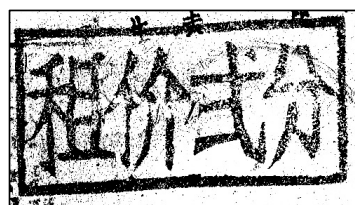


上海市虹口區書刊租賃業
武昌合作社
地址 總社 武昌路326弄
分社 天潼路334號



營業時間 總社 上午七時 至 下午九時
分社 上午八時 至 下午七時
出租 連環圖 及 古典文藝小說

ところで、1泊することで料金が2倍になることはわかったが、そもそも基本料金はいくらなのだろう。1960年の『義侠撿天』なる作品の扉には「租價式分」という印章が捺されていた〔右図〕。本作をはじめ、いくつかの50年代末期から60年代にかけての上海で用いられていた連環画にも、同様の印章の存在が認められる。



外租加倍 租 價
——★——
半 分 愛護書籍
天津市租書公司紅橋區租書商店

同書に捺されている、もうひとつの印章が、なかなかおもしろい。総社と分社それぞれの「營業時間」が明記されているのである〔左図〕。総社は午前7時から午後9時まで。分社は午前8時から午後7時まで。また貸貸する書籍のジャンルとして「連環圖」と「古典文藝小説」なる語を並列させているのも、かれらの書物への認識がうかがわれて、おもしろいではないか。

『小鴨江边的紅旗』という1958年の作品にも、価格表示の印章が捺されていた。こちらは「天津市租書公司」のケースだが、貸貸料金は「半分」すなわち「0.5分」となっているから、さきほどの「2分」にくらべると、4分の1である。地域や時代、店によっても価格の差はあったに相違ない。

この印章には、左右に縦書きで、「外租加倍」「愛護書籍」の8文字が付されている。連環画を、その場に腰をおろして読むのであれば「半分」だが、テイクアウトの場合は2倍になるということである。物価指数と、貸本屋の印章のメッセージをさらに詳細に調査することで、各時期

の貸本連環画をめぐる読書世界が、すこしずつ見えてくるかもしれない。

落書きの画廊

本に落書きをしてはいけませんというのは、読書の世界のオキテではあるが、それでもなお、人は、みずからの手でそこに痕跡を残したいとの誘惑に^{あらが}抗いきれないことが、しばしばある。

よくあるのが、タイトルなどを「そのまま書いてみました」というものだ。字の練習なのかどうか、その目的はよくわからないが、これは私物と公物にかかわらず、けっこう目にする。右図の『渡口』(1974)は小学校の図書館の蔵書印があるにも関わらず、子供の手で「渡口」と書かれている。

『千里眼』(1951)もまた、タイトルが書かれているが、ちょうど千里眼光線(?)のところに書きこまれているので、「これがほかならぬ千里眼ですよ」という、ご丁寧な説明のつもりなのかもしれないが、余計なお世話である。

余計なお世話といえば、『人民教師吳佩芳』(1960)には、表紙に描かれた主人公「吳佩芳」のまわりに「這是很好的老師(このひとはよい先生です)」と、ネタバレをしてしまっている。推理小説だったら、とんでもないことだ。

ネタバレといえば、不可解なのが、『一隻背包』(1959)だ。これは、山道で「一千二百元」の入った鞆を拾った主人公が、これを無事に落とし主に届けるまでの、心温まる性善説の物語である。表紙には札束のつまった鞆が描かれているが、落書きは、それを矢印で指し示して、「一億萬元」と書きこんでいる。ほんとうは「一千二百元」なのに、いったいなんの目的で、このような誇大広告をしなければならなかったのだろう。

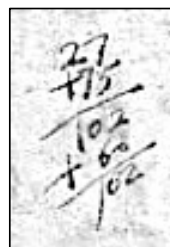


計算用紙に使われているケースも、よく見かける〔右図とその下〕。これは、連環画が、雑誌や新聞に類する、読み棄てられる書物であったことを物語っている。飲み会のお勘定の場合などで、ふと見るとそこに存在していた連環画は、不運にも、計算用紙として重宝されるのである。



落書きから落描きへ

以上は、表紙に文字を書きこむケースであったが、さらに図像が描きこまれたケースを見てみよう。なんといっても、世界人類共通の落描きの基本的なテーマは、「ヒゲ」と「メガネ」であろう。教科書に載っている歴史上の偉人たちは、もともとヒゲとメガネを装備していれば幸いだが、そうでない場合には、退屈な授業に疲弊しきったよいこたちによって、これらを描き



こまれるさだめにある。まったく教科書に載るようなエライ人には、なるものではない。

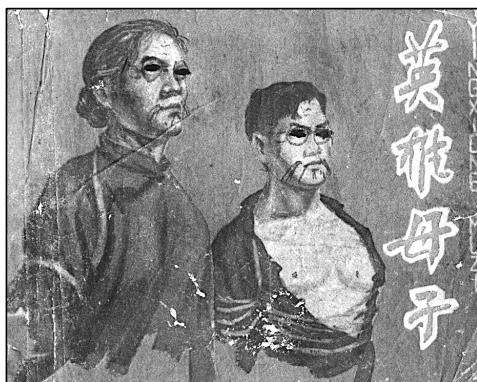
「我們是毛主席的紅小兵」シリーズの1冊として刊



行された『智闘』（1976）のヒロインである紅小兵の女の子に、こんなけしからぬイタズラ描きをした、打倒されるべき反革命分子がいた。彼女の名誉のために、本来の凛々しい顔を載せておこう〔上図〕。

『英雄母子』（1959）のごときは、タイトルでも「英雄」なりと主張しているのにもかかわらず、こんな「ヒゲとメガネ」による屈辱的な虐待を受けている〔右図〕。

連環画に描かれた人物に虐待を加えるという行為には、あるいはなんらかの精神的な病理に起因するケースもあったかもしれない。



『看不見的戦線』(1978)は、朝鮮民主主義人民共和国の秘密機関が、資本主義世界からのスパイを一網打尽にする、北朝鮮版の「ミッション・インポッシブル」を電影連環画にしたものだが、どうしてこんなことになってしまったのか……〔下図〕。



連環画をコピーする

連環画の受容のされかたは、たんに閲読に供されるのみではなかった。なにしろカッコいい図像の宝庫なのであるから、絵を描くための模範となるサンプル、一種のデザイン帳としても利用された。

先ほども似た例があったが、しばしば表紙絵の輪郭に、ペンのようなもので圧力がかけて、なぞられた痕跡が認められるものがある。その裏側を見ると、青い線が残っている。これは、表紙の裏にカーボン紙を敷いて、コピーを作ったものだ。

『小遊撃隊柳小猛』(1965)の表紙とその裏には、その作業のあとが歴然と認められる。カットにでも流用したのであろうか〔下図 左＝表紙絵 右＝表紙の裏面〕。



また、きわめておもしろいケースとして、表紙全体に格子模様が描きこまれたものがある。

『海の女児』（1975）の表紙には、縦横に直線が引かれ、それぞれ左端と上端には数字が書きこまれている。おそらくこれは、別の大きな格子が描かれた紙に、この表紙絵を拡大コピーする際に用いられたものであろう。この凛々しい少女の大きなポスターを描くための方法と思われる。



第二の〈顔〉から見えるもの

連環画は、まずは表紙に描かれた表紙絵という第一の〈顔〉を持って世に送られる。この顔は、出版部数だけ、同じものが存在する。書物として世に出たあと、さらに貸本業者や読者によって作られた、世界にひとつしかない第二の〈顔〉に整形されるという運命をたどる連環画もあった。それはおそらく、小説などといった他の書物とはくらべものにならないほど多様であり、その多様性は、連環画というものの受容のされかた、「小人書攤」という空間における閲読の形態という特殊性に由来するものでもあったろう。

第二の〈顔〉を構成するパーツは、本来の表紙に代替した新たな表紙、そこに加えるべく新たに作成された表紙絵、図書館や貸本業者によって捺された各種各様のメッセージを託された印章、読者によって加えられた文字や絵、別の作品のために流用された際の痕跡……などなどであった。

これらには、図書館に貼られた、教育的配慮による「本を大切にしましょう」とのメッセージに託された書物への尊崇とはまた異なった、中国人の連環画に対する強烈な愛着と恋慕とが、ときに連環画という書物の物理的な形体を傷つける行為をも含めながら、見え隠れしているように思うのである。そのおもな当事者は、それぞれ異なった意味で連環画との強い縁^{えにし}を結んだ、〈おっちゃん〉〈おばちゃん〉を問わず、貸本屋の亭主たちと、〈よいこ〉〈わるいこ〉を問わず、これを読みふけた子供たちであっただろう。